

Francisco Varo's  
Grammar of the Mandarin Language (1703) \*

前書きと謝辞

今我々が Francisco Varo の *Arte de la Lengua Mandarina* を翻訳したのは、我々各自が初期近代中国語とスペイン語に対して興味があり、お互いに 16 世紀から 17 世紀に中国と関わりをもったヨーロッパ人宣教師のテキストに関わってきた結果である。これら全ての分野に貢献する可能性があるため、この資料は翻訳し普及させる価値があると思われる。この努力の中我々は Sandra Breitenbach 博士（カルガリー、Alberta）という、Francisco Varo の生涯と著書の専門家からの協力という恩恵を受けた。イントロダクションで、彼女は我々2人のどちらもなしえない方法で *Arte* と著者を歴史的で知的なコンテキストに位置づけた。

この仕事の完成は、様々な機関と個人の助けなしではありえなかった。我々はまず初めに、我々に *Arte* のコピーをファクシミリで複写することを許可してくれた、ローマの Biblioteca Dell'Accademia Nazionale dei Lincei e Corsiniana に心から感謝の意を表明したい。そして我々はまた更に我々とこの図書館との連絡係を務めてくれた Breitenbach 博士にお礼の言葉を述べる。我々はまた Laurent Sagart 博士（パリ）の助けにより、Bibliothèque Nationale de France の所有する別のテキストのコピーを利用する事ができた。翻訳テキストの漢字索引の編集はアイオワ大学の Center of Asian と Pacific Studies の承諾により可能となった。そのサポートに我々は深く感謝する。最後に、*Studies in the History of the Language Sciences* の編集長である、E.F.K.Koerner 教授には、本書の出版の長い準備過程の間たゆまぬ援助を下さり、ここに謹んで感謝の意を述べたい。

W.South Coblin & Joseph A.Levi

アイオワ市、アイオワ州、1999 年 7 月

編集者の序文

1. テキストの背景

正式な記述文法は近代中国語学の伝統の一部ではなかった。等韻学と呼ばれる、伝統的音韻体系の発達における初期動機要因と考えられてきた、インド仏教との文化的、宗教的接

触ですら、中国人に彼ら自身の言語のいかなる文法書も書かせなかった。そのような文法記述は、中国に進出したヨーロッパ人カトリック宣教師とともにのみ現れ、それは 16 世紀に始まった。最初に到着した聖職者はイエズス会であったが、まもなく他の修道会の会員達もそれにつづいた。彼らはラテン語文法の教養があり、また彼らの母語、その多くはロマンス語の新しい文法的伝統にも精通していた。このラテン語とロマンス語の骨組みが彼らがまもなく書き始める事になる中国語の文法に雛形を与えた。宣教師たちは彼らの初期の活動中に出会った中国南部地方の方言、とりわけ福建省の方言に幾分専心していたが、彼らがより興味を持って学び記述したのは中国の官僚階級や官吏が使用する言語であった。この「官僚の言語」は中国語では「官話」と呼ばれ、宣教師はそれを「マンダリン」と呼んだ。

この官話の最も早い文法書として知られるのは、ドミニコ会宣教師、Juan Cobo (d.1592/93) によって書かれたものである。これはドミニコ会の記録では *Arte de la Lengua China* (中国語文法) (Gonzales 1964-1966 V, p.42) と呼ばれ、スペイン語の *arte*、直訳すれば「技術」は、文法的技術を意味する。この他にこの人物の著書とされる、よく似ているが異なるタイトルのものが二つある。すなわち、*Arte de las letras Chinas* と *Lingua Sinica ad certam revocata methodam* で、このうちどちらかは実際は *Arte de la Lengua* と同じかもしれない。その次の官話文法書としては、その書名は記録されていないが、別のドミニコ会宣教師、Francisco Diaz (1606-1646) によって、1640 年か 41 年にフィリピンで書かれたものがある (Gonzales,p.42)。3 番目には著名なドミニコ会布教団、Juan Bautista de Morales (1597-1664) によるものがある。さらに別の書として、*Arte de la Lengua Mandarina* (官話文法) という、誰かは分からないが Juan Bautista de Jesus の一人によるものがあるが、実際には Morales の文法書であろう (Gonzales,p.15)。

この「ドミニコ会文法書」系列の次の著書である、これもまた *Arte de la Lengua Mandarina* と呼ばれるものは、1682 年に Francisco Varo によって完成された。先達と同じく、著者の生きている間それは稿本として流布したが、16 年後の 1703 年、フランシスコ会修道士、Pedro de la Pinuela によって、別のフランシスコ会修道士、Basilio de Glemona の *confesionario* (すなわち告解本) と共に、広東で出版された。この本はいかなる形態の中国語文法書の中でも最も早く出版されたものであると考えられる。従って中国言語学の歴史にしめる位置、及び 17 世紀の官話に音韻、シンタックス、語彙面で具体的な資料を供給するという 2 つの理由から、大変興味深く重要なものである。これらの理由から今翻訳に取りかかったのである。

## 2. 伝記資料

Varo の文法書の歴史的背景を考えるにあたって、我々は著者と貢献者の生涯を手短に要約する事から始めたい。

2.1 Varo の生涯と著書についてはイントロダクションで詳細に取り扱われている。目立った資料は以下のように要約できる。Francisco Varo はアンダルシアの人で、1627年10月4日にセビリヤで生まれた。彼のドミニコ会信者としての活動は1643年10月7日に出身地にあった Convent de San Pablo で始まり、一年後告解を行った。それから彼は Holy Rosary Province に入会。1646年6月に先に簡単に触れた有名な布教団 Juan Bautista de Morales に参加、ドミニコ会極東布教団の根気の良い新会員となった。このグループは Veracruz に赴き、Varo はメキシコ滞在中司祭に任命された。1648年4月アカプルコから離れ、6月にマニラに到着。Varo はそこで一年間官話を学んだ。1649年7月、彼は Pasig を離れる Morales のより小さなグループに参加した。彼らは8月3日に福建省安海から3マイル南の地点に到着した。そこから Varo は他の修道士とともに福安に移り、そこで彼の中国での伝道活動が正式に始まった。

その生涯で、Varo は一方ではイエズス会との有名な「論争の儀式」での精力的かつ活発な役割が知られ、もう一方では生涯を通して熱心に中国語を学習したことで知られている。彼の官話へのすばらしい精通ぶりは布教団では伝説的であった。彼の発音の技術は初期の資料に明白に述べられており、また彼は公的な会見の場や法廷で官僚によって用いられる、分かり難く大変公式な談話形態に熟達している数少ない伝道師の一人として評判であった。Varo はまた活発で精力的な中国語の教師でもあり、文法書に加えて彼はまたポルトガル語—官話、スペイン語—官話の用語集を書いたことが知られている。Varo は二つの中国名を持っていた。その1つの、萬方濟各は彼のスペイン名を音訳しようと試みたものである。もう1つの、萬濟国は中国風に翻訳したものである。

Varo は彼の38年間の活動のほとんどを福建省北部の布教団で過ごした。しかしながら、1660年代後期の迫害の中彼は刑務所に入れられ、最後には多くの他の様々な修道会の伝道者とともに、広東へ追放された。広東での抑留の間彼は執筆者と教員としての活動をつづけた。1672年福建に戻り、1674年からは福州に落ち着き、そこが彼の永遠の活動基点となった。彼は1682年2月18日にそこで彼の *Arte de la Lengua Mandarina* を完成させた。それは稿本として広く伝わったが1687年1月31日に亡くなる日まで出版される事はなかった。

2.2 Pedro de la Pinuela は1650年メキシコ市で、スペイン人の父とスペイン系メキシコ人の母との間に生まれた (Rosso 1948; van den Wyngaert 1942)。彼はフランシスコ修道会で宗教活動を始め、神学に従事し、メキシコのサンディエゴ地区で助祭として仕えていたが、スペインから極東へ向かう布教団を率先していたフランシスコ会の Buenaventura Ibanez によって新たにそのメンバーに加わえられた。このグループは1671年3月19日アカプルコからフィリピンへと出発した。次の年 Ibanez の一行は引き続きマカオに向かい、その間 Pinuela と他の修道士はマニラに残り、聖職授任式を待った。

1676年6月4日 Pinuela と他数名は中国への航海につき、20日福建省廈門に到着した。そこから彼らは泉州に向かい、Pinuela は引き続き予定されていた目的地である寧徳へと向かった。彼がそこに到着するとすぐに満州進軍がこの地に達し彼は山に避難することを強いられた。彼は多くの地に滞在したが、そのうちの一つ穆洋で、Francisco Varo と出会い中国語を学んだ (van den Wyngaert 1942:254,265,266)。

状況が落ち着いて以降、Pinuela は寧徳に戻り、そこが福建省北部の様々な地域での彼の布教活動の基点となった。1685年から1686年には彼は Bishop Bernardino Della Chiesa に同行し中国南部の様々な地域を巡察し、広東で旅は終わったが、そこから彼は潮州へと向かった。そこでの1年後彼は新たな布教活動を始めるため江西省に移動した。彼の江西省滞在は8年続いたが、健康上の問題から病後療養するため広東への旅により中断された。1694年彼は福建に戻りその後1699年フランシスコ会中国布教団の地方分区司教の地位に選出された。1702年彼は南京に移動したがまもなく病気になり広東で療養せざるをえなかった。そこにいる間、1703年に、彼は師である Varo の文法書の稿本を再び整理し、それに Basilio de Glemona による confessionarium を付け加えた。そして同僚の Er.Placyd Walczak,別名を Placidus de Valcio によってシロが書かれた (Rosso 1948:269)。

病気の回復により、Pinuela は廈門に移り、漳州に伝道区を設立するつもりであった。しかし彼の体調は再び衰え、1704年7月30日54歳で漳州で亡くなった。Varo の Arte を編集した他、Pinuela はまた多くの中国語の本と小冊子を書いた。彼の中国名には石鐸璋という、スペイン語の Pedro を一部は意識、一部は音訳したものと、石振鐸の2つがあった。

2.3 Basilio Brollo de Glemona (または de Gemona, di Glemona, a Glemona, de Cremona) は1648年3月25日にイタリアの Gemona で生まれた。彼は22歳のとき Reformed Venetian Province のフランシスコ修道会に参加し後に哲学と神学のレクターとなった。彼は1684年に極東布教団に加入し Bishop Bernardino Della Chiesa の随員として中国に渡った。1696年彼は陝西省での教皇代理としての地位とともに、最初の中国教皇代理に選出された。しかし、この知らせを伝える大勅書は1700年まで中国に届かなかった。彼は1704年7月16日に陝西省で亡くなった。

De Glemona は西洋の言語と同じように中国語を用いて多くの書を著した。彼の中国名は葉宗賢であった。彼は38000文字という画期的語彙数の中国—ラテン語辞書の著者である。この Dictionarium Sinico-Latinum は稿本として流布した。このテキストは1813年にパリで Chretien Louis Joseph de Guignes (1759-1845) によって Dictionnaire chinois, francais, et latin, という題名のもと、de Glemona について何ら触れることなく、書き改めて出版された。この事は19世紀の中国学界で有名な剽窃事件となった。

### 3. Arte de la Mandarinina のテキストの歴史と版本

1682 年の完成と 1703 年の正式な出版の間に、Varo の *Arte* は稿本としてかなり広く流布したと考えられる (Posso 1948:269)。Pinuela の 1703 年版の製作における編集者としての役割は広範囲に渡るようだ。これらの問題に関する詳細な討論は、イントロダクションにある。

*Arte* の 1703 年版としてストラックされたコピーの正確な数は知られていない。Henri Cordier (データ: 1849-1925; 1887; 1904-1922: vol. 3, cols. 1655-1657) は彼の時代に現存していた少なくとも 7 つのコピーを知っており、その内の 5 つは主要なヨーロッパの図書館に所蔵されていた。彼はまた個人の所蔵する 2 つの稿本コピーについても述べている。印刷されたテキストは彼の説明によれば一枚の紙で始まり、その右はタイトルページである。この後には 3 枚のフォリオページによるプロローグが続き、各ページの右下にはそれぞれ 1 つ、2 つ、3 つの星印が付いている。続いてテキスト本文は 50 枚のフォリオページからなり、そのほぼ 50 枚目の左ページまで印刷されている。これらは伝統的な中国のブロック印刷本の様式に基づいて、一から五十まで中国語の漢字で外側の縁にページ付けしてある。しかしテキストは西洋式のアラビア数字でも 1 から 99 までページ付けしてある。この本は 10 枚のフォリオページの *Confessionarium* で終わられている。こちらのフォリオページには右ページごとにアラビア数字で 1 から 10 までページ付けしてある。プロローグとテキスト本文はスペイン語である。*Confessionarium* はラテン語である。本の至る所に中国語の例文があるが、これらは全てローマ字化されており以下第 4 部で討論される。オリジナルテキストには、前述したフォリオページの欄外の数字以外に漢字はない。テキストは木版印刷で、手書きのオリジナルから離れている。

*Arte* の次の版は少なくとも二つ存在した。その一つは 1835 年に Naples でラテン語訳として出版されたものである。その題名は、Cordier (1904-1922: vol. 3, col. 165) の報告によれば、*Grammatica lingua Sinensis Auctoribus PP. Varo et De Cremona ex Hispanico in Latinum idioma translata et aucta* である。このコピーは Cordier の説明によれば中国の有名な徐家匯のイエズス会図書館にあると報告されている。

もう 1 つの版については Cordier は全く知らない。Rosso (1948:271) はこれについて以下のように述べている。

2 回目の版はオリジナルのブロックから離れて 1790 年に印刷された。この 2 回目の版についてのデータは 77 ページにある。この版では、*Confessionario* は削除され、ゆえにタイトルページには記載されていない。その場所には、編集者が 9 枚の新たなフォリオページを編集し印刷した。この非常に貴重な版のコピーはニューヨークの Hispanic Society of America Library に保管されている。

どこでそして誰によってこの版が作られたかは知られていないようだ。しかしこれと関連するものとして、我々はアメリカ国会図書館が所有する *Arte* の稿本について簡単に述べたい。このテキストはノートブックに書かれ、18 世紀後期の手によると思われる。これにはプロローグと *Confessionario* が欠けている。そのタイトルページでは、Rosso が *Hispanic Society Library* テキストで見て、彼の論文の p.270 に載せたファクシミリのタイトルページとの一致に満足している事が完全に同意されている。アメリカ国会図書館のマニュスクリプトの最初の左ページは不完全でオルタネイトなタイトルページのように、このように読める。*Grammar of the Chinese Mandarin Language /Composed by the p.../In Fokien in the year 1682 / which was / Reprinted in M...of the year 1793.*この稿本のテキストは3つの点で1703年版と相当離れており、12章で作者は1790年に書いたと述べている。

つまり、アメリカ国会図書館の稿本は *Hispanic Society Library* の1790年版（或いは、より確かには1793年）と密接な関わりがある可能性が高いようだ。実際、2つの明確な可能性がそれら自身により示唆されている。1つはアメリカ国会図書館のテキストは *Hispanic Library* テキストのハンドコピーである。もう1つはそれが本物の稿本であり、それをもとに後者のテキストは印刷された。さしあたって、最初の仮説がよりもっともらしく思われる。なぜならば、もし後者の編集者がただある個所を取り替えるつもりだけで1703年版の全てを再度コピーしたとは信じがたく、とりわけその場合、彼はオリジナルの1703年のプリンティングブロックを所有していたことになる。結局は、稿本と *Hispanic Library* テキストを実際に比較するしか最終的にこの問いを解決する事はできない。

#### 4. テキストにおける文法上の骨組みと表記上の取り決め

プロローグから始まり、テキストには有名なスペインの文法学者である、Antonio de Nebrija (1444-1522) への言及が多くあり、彼の *Arte* に採用された文法分析の骨組みへの影響ははっきりと認められる。更に、特に13章では、「別の文法」や「古い文法」への言及があり、それはより初期のドミニコ会布教団によって編纂されたものである。これらが上述の1. で述べた幾つかの「ドミニコ会の文法書」についての言及である事はほぼ確実である。*Arte* とこれら初期の文法書及び文法的伝統との間の関係はイントロダクションで詳しく取り上げられている。

しかしながら、ここで Varo の中国語の発音表記体系について手短かに述べる必要がある。まず最初に、*Arte* で「官話」と表記される言語は実際には少なくとも16世紀から18世紀まで中国を支配していたと現在では一般的に考えられている南京語を基礎とした口語である。Varo の「官話」はゆえにいかなる時代の北京方言や「北京官話」も意味しない。口語に対する実験的な表記はマテオ・リッチ (1552-1610) と彼の仲間や弟子によって16世紀後期

に発達した。彼らのローマ字表記は数十年後のニコラス・トリゴート（1577-1628）の『西儒耳目資』で最も完成された形態に到達し、1626年に印刷された。Varoのローマ字表記の多くはトリゴートの体系を最小限に修正したもので、特にスペイン語を話す読者の要望に応じたものである。これに関する詳しい議論は、Coblin（1996,1997,1998）に見える。以下要約したものを記す。Varoの表記の後ろには、角括弧に予想される音価が記される。

語頭子音

最終音節

声調

清平 中或いは中上の高さで、長音記号と共に書かれる。

濁平 下降、曲折アクセントと共に書かれる。

上 中降、低アクセントと共に書かれる。

去 上中から上昇、鋭アクセントと共に書かれる。

入 中昇し急に或いは不意に止まる、短音記号と共に書かれる。

この表音体系はテキスト本文を通して首尾一貫して用いられる。しかしながら、プロローグではフランス人読者のために別のローマ字表記が紹介されている。このフランス式は、テキストの論議と例文からできる限り正確に決められたものであり、以下に示す。

語頭子音

最終音節

フランス式の声調記号は元のローマ字表記と一致する。

## 5. 翻訳の構造と協定

我々は Arte de la Lengua Mandarinina を翻訳する際、基本的に 1703 年版を用いた。具体的には、ローマの Biblioteca Dell'Accademia Nazionale dei Lincei e Corsiniana が所蔵するものである。Bibliothèque Nationale de France が所蔵する別のコピーもまた考慮に入れた。この 1703 年版と、年代を 1790 年から 1793 年と定められたアメリカ国会図書館の稿本テキストとの比較を行った。我々は 2 つの版は実質上 1 章、12 章そして 15 章の 3 カ所を除いて同じである事を見出した。稿本版のテキストのこれらの部分は付加物として個別に翻訳されたものである。序章、16 章、そして Confessionarium はアメリカ国会図書館の稿本にはない。

我々の英語の翻訳は 1703 年のオリジナルのページ区分に従って分かれており、それぞれの翻訳ページの反対側には対応する Lincei Accademia テキストのファクシミリページが置かれる。1790 年から 93 年の稿本版の翻訳にはファクシミリは与えられていない。これらの翻

訳は稿本のページ区分に従って分かれている。

印刷版テキストのプロローグは3つのフォリオから成り、それぞれ1つ、2つ、3つの星が記される。我々は翻訳では星の代わりにローマ数字を用いた。先に指摘したように、テキスト本文は西洋式にページ付けされておりフォリオはまた中国風に記される。我々は翻訳では西洋式のページ付けに従った。Confessionarium は西洋式にページ付けされたフォリオである。アメリカ国会図書館の稿本はページごとにページ付けしてある。

翻訳中の全ての脚注は新しいものである。オリジナルテキストには注はない。翻訳中の丸括弧はオリジナルから保たれたものである。角括弧は翻訳者の付加を示す。本自身のオリジナルテキストはスペイン語であり、多くのラテン語が加えられている。ある場合には、オリジナルのスペイン語が与えられ、翻訳が括弧内に加えられる。しばしば出現するラテン語の決まった要素、例えば「或いは」を意味する *vel* 等は、特に注意することなく翻訳された。その他の全てのラテン語の語形はイタリック体で記し括弧内に訳した。Confessionarium の西洋言語の部分はラテン語であり、それは英語に訳した。テキスト中の音訳された中国語の語形は、Varo のプラクティスでは語頭子音の後の音節の上のいかなる場所にも書かれたであろう区別的発音符を除いては、オリジナル通りに復元した。我々はそれらを以下のように様式化した。帯気音を表すアポストロフィは、語頭子音の直接後に置く。声調記号とライズドットは音節の主母音の上を書く。ドットは長音記号と短音記号の上と低、鋭、曲折アクセントの下を書く。オリジナルテキストには漢字は出現しない。我々の翻訳では確認できる箇所は漢字を挿入した。疑わしい箇所は、漢字の代わりに空欄記号を加えた。Confessionarium テキストの漢字を決定するのに、我々は古屋昭弘氏 (1991, 1992) によるこの資料の注意深い研究から大いに恩恵を受けた。漢字のピンイン索引は265ページ以下にある。

#### 参考文献 (次号以降に挙げる)

\* ヨーロッパ人宣教師による最初の中国語文法書は Francisco Varo (中国名を萬濟國) による *Arte de la Lengua Mandarina* (1703, Canton) であるが、それは当時の「官話」というものの性格や、ヨーロッパ人の見た中国語がいかなるものであったか、更には、中国語そのものの特徴を考える上でも非常に重要な文献と言えよう。本書はスペイン語(例文集の欧文部分はラテン語)で書かれたものであるが、この度、下記のような原書のファクシミリコピーに英訳が付されたものが出版されたのを機会に、その英訳に基づいて日本語訳を試みることにした。なお、Varo に関しては、これまで古屋昭弘氏の一連の先行研究がある。

W.South Colbin, Joseph A. Levi: *Francisco Varo's Grammar of the Mandarin Language (1703) An English translation of 'Arte de la lengua Mandarina'* (John Benjamins publishing company, Amsterdam / Philadelphia, 2000)